

長崎大リレー講座・要旨 ⑤

困難にぶつかり人は育つ

損害保険とはどういうもので、東日本大震災ではどのように機能したのか話していきたい。損害保険は国の社会保険とは異なり、民間が運営し、強制ではなく任意で加入する。万が一の事故の際は、顧客と連絡を取りながら現物一つ一つを調査、確認して原因や損害を確定させることが基本となる。

現場力の発揮と経営トップの在り方

あいおいニッセイ同和損害保険社長

鈴木 久仁氏

のバックアップを受け国民一体でつくり上げた制度。今回の震災で地震保険の支払金額は業界全体で1兆1千億円を超えた。阪神大震災では783億円だったので、今回の被害がいかに甚大だったかが分かる。保険金の支払いは震災後3カ月で1兆円を超え、早期に支払うことができた。

あつた。特に指示をしたわけではないが、このことが迅速な保険金支払いのスタートになった。現場力とは自ら考え、判断し実行すること。現場を尊重することも重要だがそれがすべてではなく、経営トップが現場のベクトルをそろえ、方針を明示する必要がある。私が社内や業界に向けて申し上げたのは、「一日も早く保険金を支払う」と。また今回の事態は損保業界の存在意義を問われる。今こそ役に立たなくしてはならないとの理念をあらためて徹底した。

が基本だが、航空写真や衛星写真で「全損一括認定」という方法を損保業界として初めて実行した。非常時には従来と同じことは通用しない。現場はルールに則して頑張るもので、そのルールを超えることは経営トップでなければできない。現場力は経営トップのマネジメントに左右され、この二つは危機を乗り越えるための両輪だ。現場力を発揮できる人材をどうすれば育成できるのか。震災で気付いたのは困難にぶつかってこそ人は育つ、ということ。その危機や困難をどういう形で現場に与えるかが、経営側の課題といえる。それにノウハウはなく、悩み続けるしかないだろう。

現場の損害を調査すること